進化する出版社～新たな物語への挑戦～

吉田　隆　（ＮＴＳ代表取締役）

2. 出版社の仕事

●「出版社の崩壊は営業部門ではなく編集部門から始まる。」

これも又、出版業界の某幹部から伺った言葉である。編集企画部長を兼務する私には耳が痛い。幹部曰く「弊社は元々出版社だった。ある年、辞典が大当たりした。それから編集企画部の陣容を拡充したが、やがて室内で編集業務に専念するようになった結果、企画が弱体化し、新商品に恵まれなくなり会社は倒産した。その後、営業機能を生かし書店として復活した」。前号で述べた「出版社は組版工程の界面性ないしは両義性を通して、容易に【情報通信業】から【製造業】に移行する特質がある」ことを象徴している。

●出版社の仕事とは智恵や知識等の新しい価値を社会にメッセージとして伝え、人々に幸福や利便性を与えることである。

新しい価値とは理系、文系を問わず'人'から生まれるので、出版社の仕事を言い替えれば、新しい価値を持つ"人即ち著者を発見し"その智恵や知識を社会に広く伝えることである。営業部の仕事は、メッセージの受け手である読者を探し出すことであり、編集企画部の仕事の根幹はメッセージの送り手である'著者の探索と発見'である。

●なぜ容易に【情報通信業】から【製造業】に移行するのだろうか?

編集企画と一口に言うがそこには本質的に共存しがたい工程が一括りにされている。編集企画者は世の中の変化に耳をそばだて、アンテナに新しい価値や情報がヒットすればすぐに現場へ直行し著者を取材し確かめる。選択した情報(=テーマ)が企画会議で採択後、編集会議を開き著者と共に情報の内容を議論する。内容が固まったら原稿執筆を依頼する。そこまでが編集企画者の仕事の第一ステージである。その後、原稿が届いてから第二ステージが始まる。原稿には誤字脱字以外に編集方針から外れる記述もあるだろう。原稿段階でそこに修正を加え、編集プロダクションによる文字指定他の原稿整理を行なった後、印刷業者に走稿する。印刷業者は仕様に従い組版工程を経て、編集企画者の下に校正紙を届けるが、その出来不出来が編集企画者の仕事の負担を左右する。以上の二つのステージは全く性格が異なる。第一ステージは現場取材・フットワーク型であり、第二ステージは頭脳労働・デスクワーク型である。前者を企画、後者を編集と大まかに区分けする考え方も出来るだろう。

編集企画部のスタッフに企画と編集のどちらをやりたいか尋ねると概ね両方という答えが返る。'自分が企画した本を自分で出す'、これは出版社に入社したものの夢である。だが、更に尋ねると編集の方が好きだと言う答えに変わる。著者を求め外部を出歩く企画の仕事はアクティブ(狩猟)型に近く、高い品質を求めて机に向う編集の仕事は(農耕)型に近い。両者は本質的に両立し難い。出版社の編集企画部門に入社するのは圧倒的に農耕型タイプが多く、実感的には90%以上が編集者タイプである。

'新しい著者を発見する仕事'と'正確な情報を編み出す仕事'はどちらも十分に時間をかける必要があるので両者を並行して行うことはできない。よい企画者は日々現場と闘い、よい編集者は日々原稿と闘う。どだい仕事にかける時間の割り振りが無理なのである。

●出版社が【情報通信業】から【製造業】に容易に移行する傾向は編集企画機能が企画から編集に偏重することによる。

そうなると商品企画機能が出版社から失われる。出版社の寿命20年説の根拠もこの辺りにある。同じ課題を抱える出版各社の対応策の一つは編集と営業との人事交流を行うことだが、NTSならではの方法は企画力が決め手のセミナー事業を積極的に出版機能に組み込むことである。その他、企画者として育てたい若い編集企画者には原稿を読むことから始めさせず'若い人には旅を'の言葉通り現場取材から経験させることが肝要である。原稿を読むのは経験を積んでからでも遅くはない。他の業種と同じく出版業には若い時に、身体を張ってしか学べないことが余りに多い。始めに原稿から入るとそこから抜け出すのは容易ではない。出版社を経営して初めて分かることは原稿とはツクヅク'魔物'だということである。

◉編集後記

先日、健康診断の再検査で初めて胃カメラを飲んだ。口より鼻からの方が楽だという医師の奨めで経鼻タイプにした。注射を打ち、麻酔のような薬を口に含ませ上を向いたまま5分間。同様の患者がテンポ良く並べられていく。診察台に連れられ、口に何かをくわえさせられると鼻に入らない太さの内視鏡が近づいてきた。慌てて何かをくわえたままモゴモゴ。「これを鼻に入れるんですか?」取り違いされた。別の診察室に連れられ、今度は鼻腔を拡げる為の何かを鼻に入れて20分。今度は細い内視鏡で順調にと思いきや、胃の粘膜を洗浄しきれない。「経鼻タイプはこれが難点なんです」。先に説明してほしい。私の提案でベッドに起き上がり、胃全体の撮影完了。病院側の問題はあるが、事前に納得いくまで説明を求めなければ。鼻血を出して反省です。(奈)

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-0034　東京都文京区湯島2-16-16　㈱エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX : 03-3814-9152　E-mail : eigyo@nts-book.co.jp

NTSニュース
2008年7月号（通巻113号）
2008年7月10日発行